［講演１］上久堅の集落自治　－都市と農村との交流－

【講師】長谷部三弘（はせべ・みひろ）　飯田市上久堅　昭和７年生まれ

長谷部：ご紹介いただきました長谷部です。皆さんのお手元にレジメがあるかと思いますが、今日与えられたテーマは「集落自治から見えてくるもの」、副題として「都市と農村との交流」とこうありますが、私の場合は「都市と農村」というより「まちとむら」、まちは街ということです。後からお話しますが飯田の街の中にある知久町１丁目という老舗のそろった街、銀行の支店もある、そういうところの人たちと、私の住まうところとの交流。都市と農村というと、遠いところの人たちかと、こちらは農村かというとそうではなくて、そこに住まうもの同士が、町場に住まうものと中山間地の農村に住まうものとがどう交流をしているかという、そういうお話になるかと思いますのでご承知いただきたいと思います。それから10月には私どもの方に来てくださるお話を聞いておりますが、まあ聞くと見るとで大違いということもありますので、あまり期待されてくると困りますが、私どもは飯田からちょうど10キロを離れたところに、標高でいうと650mというところにあって、その下段に私の先輩である宮内さんの柿野沢という所があります。そんなイメージを心の中に置きながら聞いていただきたいと思います。

集落自治から見えてくるもの　……都市と農村との交流……

Ⅰ　「地域をどうとらえるか

1　今、地域は

2　その規模と概念

3　集落の特性

Ⅱ　「まち」と「むら」の交流

1　知久町１丁目と上久堅柏原の交流　（別添資料１）

2　生産者と消費者の交流（野菜の産地直送事業）　（別添資料２）

Ⅲ　やるのは自分（シンガー ソング ライター）

1　鎮守の杜構想…十三の郷づくり…と集落づくりの設計図（別添資料３）

2　三つの約束（シンボル花木、実践グループ、行動計画）（別添資料４）

Ⅳ　ひさかた風土舎の戦術・戦略（別添資料５）

1　2・6・2の集団力学

2　やらずに関する７章

（飯田市　長谷部三弘）

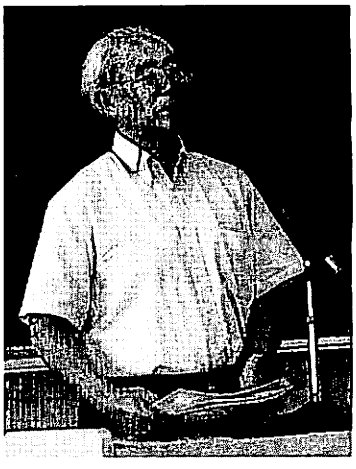
１．「地域」をどうとらえるか

私はいま地域をどうとらえるかということを、私なりきにこうとらえます。地域という概念の範囲を、私は昔の上久堅村というくらいの範囲と、さらに集落とか町内会というくらいのところを地域ととらえて、地域というお話をしたいと思います。

いま地域は、特に年金なんかがちゃんともらえるようになって、年寄り夫婦が一組だけで暮らせるようになって、かつては農村というものはみんな年を取っても若い人たちが年寄りを支えて暮らしたから、２世代、３世代という同居は当たり前でした。最近ではそういうことがなくなりました。

もう一つは職業と住まう場所、職住が分離してきたということが大きな原因で、地域に対する帰属意識ということがなくなりました。どこに帰属意識があるかというと、だいたい働いている場所、自分が収入を得ている所、あるいは働いている場所の方への帰属意識が強くなって、地域で何かしようというと非常に困難な状況になっているというのがいま出てきています。

それともう一つは、今の農村のなかでも農地の荒廃は本当にひどいです。山が降りてくるというようなことを言っていますが。かつて私どものところにも馬がおりましたが、今は馬は一匹もおりません。何がいるかといいますと、鹿がだいぶいます。馬と鹿が一緒にいると困ってしまいますが、



お陰さまで馬がいなくなって鹿だけで、仕方がないと思っていますが、その鹿も退治するのに苦労してしまう、そういう状況の中で農地は荒れていく。

私のところもかつて家に馬がいました。馬がいると親父が秣（まぐさ）を刈って、土手の草なのですが、いつも非常にきれいに三番草くらいまで刈って、それをみんな家畜に与えていました。そういうことがなくなりましたので、もう農村は土手の草が生い茂ってひどいですね。

ですからそのような状況のなかで、いま地域でいろんなことをやっているわけです。私は先ほど地域の規模を集落におくと言いましたが、地域の概念を私は、高齢者と子供や幼児が歩いていかれる範囲を地域として考えています。もっと文学的にいえば、お寺の鐘の聞こえる範囲。そういうところがどう自立して、どう活動できるかということに中心をおいて考えてきました。そのなかで集落の特性を、私は７つくらい上げて考えてみたいと思います。

一つは、集落は分家・本家という血縁関係が非常に濃いので、助け合いの精神がある。助け合うということが非常にできるんです。たとえば何か物が足りなくなると本家に行く、あるいは分家に行くとか、なにかできるとそちらに上げたり、もらったりする。またはどこかへ旅に行ってきたりすると、隣組はもちろんそうですが、分家・本家あるいは血縁関係でそういうつながりがある。ですからいま福祉で自助・共助・公助といっていますが、もちろん自分で福祉を考えなければいけませんが、共助という、共に助けるという部分はここのところにくるわけです。ですからそういうことは非常にできる。助け合うことができる。公助というのは公ですが、公はもちろんサービスセンターやデイケアでできるようなことをやって、福祉はこの３つで成り立つなかの、共助というのは集落では今でもできやすい状況にあるというのは一つの特徴です。

二つめは、近隣の親しさ、親しいのはいいけれども、利害と得失がストレートなんです。隣の柿の木が非常にじゃまだとか、隣の何々がじゃまだというようなことはなかなか親しい間では言えないということがあって、そのようなことで反目するということがいくらでもあるわけです。そのようにして親しいけれども、利害・得失が直接的だということが二つ目です。

三つめは、隣近所の監視が非常に強いですね。今日たくさん車が来ているがあれは何だろう。法事をやるのかな、何をやるのかな、そういううふうにいつも耳をそばだてているというか、監視されているという感じです。ですからプライバシーが侵されやすいということで、そういうところで暮らすのはいやだという人たちがたくさんいます。かつては私どものところでは、農村というものはみんなそういうふうだけれども、親しくして暮らしてきたけれども、プライバシーからみると、今は個人情報とかいって非常にやかましくなってきたので、暮らしにくいなあというんですね。

それから四つめは、先住民ばっかりで、私どものところは新しく入ってくる人は、最近１軒だけありましたが、ほとんどないんです。昔からの人だけが住んでいる、そういうところですから、まとまりが非常にいいんです。何かやろうと言っても、さっとまとまるけれども、閉鎖的だというんです。そこから新しいことに抜け出すということが非常に難しい。先住民ばっかりで、新しい人が入ってこない、要するに新陳代謝がない、そういう意味で言っているわけです。

それから、五つめは個人の主張をしにくい。飛び出て何か言いにくいということです。ですから異論を出しにくい。何か決めるときに異論をなかなか出しにくい。逆に言えばまとまりがいいんだけれど、全体主義になりやすい。翼賛的になりやすくて、一人ばかり反対するとみんなから白い目で見られるんだという。ですからまとまりの良さと、全体主義になるという、両刃の剣というか、両方の刃を持っている、そういう特徴があります。

六つめは、社会的地位だとか名声だとかが通用しないんです。大学で教授だとか、名前が売れて

いるとか言ったって、日常の言動をみんな見ているわけだから、あんな立派なことを言ったって、家へ行けば何にもやっていないとか、そういうふうに見られてしまうんです。たとえば空き缶拾いをみんなでやろうといったって、そのとききちんとやらなくて、サボっていたりすれば、言うことは言うけれども、やることはやらないじゃないかと、そういう見方をちゃんとしているので、それは社会的に地位が高くて名声があったとしても、集落では通用しないということを承知しないといけないなと、こういう話です。

七つ目は、立て前論だけでは通用しない。本音がある。本当は金が欲しいくせにという、そういうふうに腹の中では本音があるんだけれども、本音を言わないで立て前論だけ言っていたんでは、こういうところでは通用しない。

集落というか地域というところは、いやな側面をたくさん持っているけれど、しかし温かくてみんなで助け合うというそういう良いところが集落だと、こういうふうに私は受け止めています。

2.「まち」(街)と「むら」(集落)の交流

そこで、私どもはそういうところで長く暮らして、地域をどうやっていくかという話をしていたときに、たまたま玉井先生が私どもの所に来てくださいました。街の中も過疎化が進んでいく、私どもの中山間地も過疎化が進んでいくという、過疎と過疎が集まればプラスになる、マイナスとマイナスがプラスになると同じように、生産者と消費者と何かやったらどうか、そういう話が玉井先生から出て、じゃあ街に住まう人は消費者で、私どもは中山間地に住む農業の生産者で、その生産者と消費者とが一緒になって何か考えられないかということになった。いろいろ話し合った結果、町場に私どもの作った野菜を持っていって買ってもらえばどうかという話になりました。

当時私はまだ現職でした。現職でしたが、地域の人たちと一緒になっていろいろやっていました。いわば私は百姓をやりながら、その合間に役所に行っていたような感じです。養蚕もやっていましたので、朝たくさん桑をトラックいっぱい採ってきて、それから役所に行って、帰ってきてからその片づけをしたりするというくらいに、ずっと家の仕事の農業を手伝いながら、あるいは地域の人たちと一緒に活動しながら役所に行っていました。そういう経験があったんで、町場に住まう人と、私ども中山間地に住まう人の橋渡しを、先生がせっかく来てくださったんなら何とかしようということになりました。では、こっちで採れたものを朝持っていって、空車で行くんだから、毎日何十馬力かは空回しで行くよりは、その車に乗せて持っていって買ってもらったらどうだいと言われて、そりゃそうだ、じゃあと言ったところが、なかなかうんと言わないんです、近所の衆が。そんな町場(知久町1丁目)のハイカラな衆とわしらとなんか付き合いはいやだと言って、なかなか乗らなかったけれども、しかし、私ども会をつくっていた以上何かをやろうということになって、じゃあ私が行くときに車に乗っけてと言って、コンテナに5つくらい乗用車のトランクから座席に乗せて持っていったら、これがすごかったんです。

街の人たちがわーっと来てあっという間に売れた。それはそうです朝とれたか、前の日に採ったか、見てくれは悪いが新鮮で、価格が安いから。そういうのを見たら近くのおばさまたちが、「いや、すごい」と、じゃあだんだん順番で持っていこうというふうにして始めて、今年で23年間続いてきました。そして街の人との付き合いがずっと始まって、時計を買うならそこの時計屋さん、お菓子ならあそこのお菓子屋さん、ネクタイならここ、私も子供の嫁の仕度ならその呉服屋さんと、ほとんどそれがそろっている店とのつながりができて、もう20何年もやっていますので、まったく親戚づきあいができています。秋になると収穫祭。私どものところは松茸が採れるので、松茸狩りを一緒にやって収穫祭を一緒にやっています。最近はだんだん贅沢になって、松茸はすき焼きではうまくない、焼いて食べなければうまくないと言って、山ほど焼いて食べるというような、そういう交流がずっと続いています。

町場の人たちも自分たちの商品を売ったり、付き合いをしたり、私も年賀のお年玉（ねんぎょく）もそこで買ったり、おうつりもそこで買うという、私どもはそういう商人（あきんど）から、彼らは生産者の作った野菜を買ってくれるという、こういう交流が始まったわけです。そういうことがどのくらい続いたかといいますと、皆さんのお手許の資料にもあります。平成19年度（2007）までに売った野菜が、1袋100円で売った袋がいくら売れたかというと、843,903袋というのが街の人たちに買っていただいた数字です。

最初にこの会（柏原農業を考える会）をつくったときに、どうやってつくったかといいますと、①みんなの「つぶやき」や「ささやき」の声をまとめる。農業はこんなふうになって困るとか、作り方が分からないとか、消毒の仕方が分からないとか、何を作ったらいいか分からないとかいう、そういう集落の人のつぶやきがいっぱいあるのをたくさん書いて、こんなことをつぶやいたり、ささやいたりする人は、他人はいざ知らず自分だけはやってみたいという人は1,000円持って集まれ、そういう触れを出したら集まったのは34人でした。世帯数70戸の集落ですが、34人が集まってどうするかといって「農業を考える会」をつくったのが始まりでした。3年くらいどうする、どうすると考えてきたけれども、そこに玉井先生のお話があって、じゃあ農業研究会もするけれども、販売もいくらかお金になることもやりたいと始まったのが、知久町1丁目との交流でした。

そこでだんだん人が減っていって、今は6軒だけになりました。私も50代で始めたのですが、20年もそれが続いていくと鬼籍に入った人もだんだん増えてきて、新たな人が入らないんです。どんどん減っていくんですが、不思議なことに出荷の量はあまり減らないんです。4分の1、5分の1になったけれども、出荷の量は減らないでこれだけの数字ができていくわけです。ですから、いま若い人たちに、50代の人たちに「どうだい」と言っても、「いや、忙しくて」といってなかなか入らないんです。私も役所に行きながらで忙しかったんですが、やればできると思うけれど、ななかやることができないという状況があるわけです。

どんなふうにしているかというと、皆さんのお手許に「『まちとむら』産直交流の概要」という資料があると思います。昭和57年（1982）にできた、それが3年後に知久町と交流が始まって、私どものねらいは「『農』をベースに、暮らしに潤いとゆとりを!!」でした。「農業」ではなくて「農」なんです。農業というと生業としてたいへんですが、業を取った「農」としての潜在的な力というか、そういうものを暮らしに活かしていきたいということで、ここにあるような形ができて、むらの柏原から10km離れたまちの知久町にむらに住む生産者と、まちに住む消費者の交流で「地域で生産、地域で消費」、今では「地産地消」という言葉が言われていますが、私どもはもっと前、20年も前に地産地消をやっています。

そのほかに定例の学習会というものがあって、玉井先生にも平成6年ほか何回も来ていただいています。産直事業は月曜日を休んで毎日やっています。月曜日というのは街の方が休みのためです。朝採ったものを、あるいは前日採ったものを荷造りして、朝6時半に近くの集荷所に持っていって、そしてトラックで運搬していって10時までに無人スタンドに、知久町1丁目の銀行の支店のところにスタンドがあるので、これはなぜ無人にしてあるかというと、商売をやるとなると露天商の許可がいるんです。それから公道を使うとなると、県なり市なりの許可がいる。ですから銀行の前に道路から1m下がったところにベンチが置いてあるんですが、そこは銀行の土地だから道路は使っていませんよということで、無人ですのでお金は竹筒、私どもの方は孟宗竹がありますので、それを切って穴を開けてそこに置いて、買った人はその中に入れてもらう。1袋100円ですから。

だいたい持っていったときに8割くらいは売れてしまうんです。残りは台の上に置いて帰ってくるんです。竹筒は取られるといけないので鍵をかけておきます。今まで鍵をかけなくて取られたことが1回だけあります。お昼ごろまでに売れてしまいますので、街の人が竹筒は回収してくれます。次の日に行ったときに竹筒を持ち帰るんですが、1週間経つと竹筒が6本たまります。その6本を竹取物語、割ってお金を出して、だれそれさんはいくらでしたよという計算を全部して、渡します。

1袋100円ですが、みんな100円で売れないことがけっこうあるんです。残念ながら1円玉の人もいるし、10円玉の人もいるし、なかにはゲームコインも入っています。ですから掛ける90円、300個出したとすると27,000円となるように、いま露地物がたくさん出る時期ですから、だいたいそんなくらいの金額が入ってきています。でも最近はだんだん回収率が悪くなって、ずーっと20年近く90%以上、95%くらいを維持してきましたが、今はやっと90%ですから、90%で90円で払ってしまうと経費が残らないんです。85%くらいにしたいところを、90%でやっております。そんなことで1週間分をまとめてお金が入ってきます。

計算はずーっと私が係で、最近はエクセルというソフトを使ってパソコンでやるとさっとできて楽になりました。前は電卓をたたいてみんなの分を計算して、古い封筒にいつ幾日は何個出ましたよと書いて、その封筒にお金を入れて配る。このときが見事なんです。すぐ中を見ないんです。10mくらい行ってから見て、ニヤッと笑って手応えを確かめるんです。100円玉が300個あると結構なものなんです。そこで「現金なものだ」と誰かが言っていましたが。銀行なんかはそんな面倒な計算をするよりかは、私のところへ誰がいくつ出したと言ってくれれば、すぐ計算して口座に振り込んであげますといってくれましたが、それではダメなんです。現金の重さという実感がないんです、通帳の数字だけ見たんでは。1週間に一度だけそれを実感するという楽しみがあるんです。

それと現在3班に分かれてやっていますが、1週間に一度ずつ竹筒を割って現金を数え、仕分けをして封筒に詰めるまでにだいたい30分かかります。できあがった後に、ビールを持ってきたりお茶を持ってきたりしてお話をする。このお話が私のニュースソースというか、いろいろの情報がそのとき一番よく分かります。誰が病気をしたか、どこの誰が浮気をしたかということまで、そのとき聞かれるので、毎週私は出席します。

山菜の出る5月の末から、露地物の終わる10月いっぱいやりますので、23週から25週やります。私は25回出ていくわけですが、ですから25回人の話が聞けるわけです。このことがたまらなくて、ずーっと私は計算の係を辞めずに23年間やってきました。そんなふうにして街と村の交流というか、野菜の産直事業をやってきましたが、私は先ほども申しましたように、都市と農村というそういう大きな単位で交流するんではなくて、町場に住まう者と中山間地に住まう者とがずっと交流して親しくなる。それこそ最初に「あんなハイカラな人たちといやだ」と言った、いま私どものお爺ちゃんやお婆ちゃんになりました連中も、もう本当に気楽に話ができるようになって、やはりやらなきゃダメだなという実感を持っているところであります。

3．やるのは自分（シンガー・ソング・ライター）

さて、そういう産地直送の事業でありますが、私は3番目に「やるのは自分（シンガー・ソング・ライター）」と書いてありますが、自分で歌を作って、作詞して作曲して、歌うということと同じように、地域づくり、まちづくりというのは「やるのは自分」いわれてやるのではだめです。私どもは（飯田市に）合併して（中心からは）遠い（上久堅という）地区となってとなって、飯田の人口からすれば1.4%しかいない、そんな所ですから、私も役所にいたけれども、10kmも遠い地域のことなどなかなか見えないんです。ですから地域で暮らす人たちは、なんとか自分たちでやらないとできないな、ということでやったのが「鎮守の杜構想」です。

これをみんなでつくろうということで、ここの基本になっているのは、「十三（とさ）の郷づくり」といって13の集落があるけれども、その13の集落が一つひとつが自立することにあると。昔の上久堅村全体がというふうに考えるんではなくて、そういうことは役所が考えてくれればいいんで、本当はそこに住まうお寺の鐘の聞こえる範囲の集落が自立することであるといって、「十三（とさ）の郷づくり」といってやったんです。わたしは「十三（とみ）の郷」とやったら、富んでもいないのにとんでもないといって否決になりましたが、ところが「十三（とさ）の郷づくり」と

いうのはけっこう語呂がよくて、鎮守の杜構想がもうずっと20数年経ってもあせていないんです。

私どものまわりの集落もみな、自分たちの地域で自分たちの構想を立てました。つくったけれどもそれは絵に描いた餅というか、こういうことをつくるぞ、ああいうことをつくるぞ、こうやってやるよ、ここのところこうあったらいいと願いを書いただけで、具体的な実践がないと、ああいうことは本当に絵に描いた餅になってしまいますが、私は自慢ではないけれども、私どもの計画はまだあせていない。というのはそこに3つの約束があったからだと、こういふうに思っています。

一つは自分たちの集落のシンボルツリーを考えようと。なぜそうしたかというと、花を愛でる気持というのはそれぞれにあるけれども、十人いれば十人十色だと、みんなが一つになって心が一つにできることを選べるようでなければ、村おこしはできないよということから、自分たちのシンボルツリーを考えようということになって、シンボルツリーというか花木ですね。そのときに、そんなのはできないよというところもあったんですが、できないところは置いていくよということで、宝くじと同じで買わなければダメです。オラほうは10年経ってこれだけになったけれども、植えてなければゼロです。「じゃあ君たちのところは置いていくよ」と言ったら、「それじゃ困る」と言うんで、困るならつくったらいいということで、つくったのが皆さんのところにある「鎮守の杜構想」の花の絵です。

私のところは柏原ともいいますが原平です。原平は梅ですので、このときに私どもは「花も実もなる梅の郷」というキャッチフレーズをつくったんです。それで法被なんかにもそういう名前を付けて作ったんですが、「や、おめえのところはこすいな」、「それはせっかくだもんで、花だけ見るより実もあった方がいいじゃないか」ということで梅にしたんです。

隣の中宮というところは桜があって、公園に夜桜が楽しめるようにライトアップしたりしています。そこは「桜の園」だといって、公園には桜、家の前にはシバザクラ、サクラソウ、すべて桜の園にしようといって、その集落は決めました。

神之峰という城跡がありますが、そこの下平はミツバツツジが自生していますので、もちろんミツバツツジ。その下に川が流れていて、狭窄部分というか掘れている細長い集落です。そこの大鹿はキンモクセイ。「キンモクセイの香る郷」といって、秋になって川上に立つと、川下からずっとキンモクセイが香ってくるように、それぞれのところにキンモクセイを植えました。

それから学校がありますが、学校はああいうところですから、土手が高くて犬走りが長いので、法面がたくさんあります。そこにアジサイを植えました。アジサイは県会議員の助言で、県の緑化事業として支給になったので、風張の集落ではそこにアジサイを植えて、そこは植えただけではなくて、アジサイが咲くとアジサイ祭りといって、毎年6月の末か7月の初めにアジサイ祭りをやるんです。祭りというのは宗教的な祭りではなくて、今でいえばイベントとかフェスティバル、そんな言葉でいえばイベントでしょうが、そこでは流しそうめんとか、ご幣餅とか、カラオケ大会などいろいろやって、半日を楽しむということがそこから始まりました。さらに越久保というところでは、街道にサツキを植える。あるいは落倉（おとしくら）というところでは、ナンテンを「難を転ずる」といって、正月用の切り花に趣味と実益を兼ねてそういうのを作って、誰が一番良いナンテンを作ったかという南天コンクールという、なんておもしろい話というのがあります。

そういうふうにして、たかが1本の花木なんだけれども、それをブーブー言っていたのが、その木を植えたために風は向こうから吹いてきて、宝くじの緑化推進事業というところが、どこで見つけたのか100万円金をくれるというので、100万円金をもらって農村広場にその「十三の郷」の花を植えました。900本植えました。そこでは1年にいっぺんみんなが集まって手入れをして、交流会が始まって、そしてそれは集落ごとにやるんですが、花木がおかしくなっていると、おまえの区の花木はおかしいじゃないかと言われる。草が生えていると言われると区長さんが行って草取りをするというようにちゃんとみんなで守ってやっている。そういうことが、1本の花木だけれど全体をまとめる活動と、集落ごとに自分たちのシンボルを作るという作業になっています。

二つめは、それぞれの地域が行動計画をつくりなさいという約束事でした。私どもではどういう行動計画を立ったかというと、農業構造改善事業では水田などはできてしまったので、下水がほしいなという話になって、当時農業集落排水事業（農集排）の事業があるということが分かったので、それをやるためには自己負担金が事業費の5％必要です。そうすると今から積み立てないと、すぐには金がないよということで、5,000円ずつそのときから積み立てて、じゃあどうやったら補助金が早く取れるかという話をしたときに、県会議員か国会議員に松茸の1貫目ももって陳情しなければダメだというような話も出ましたが、そんなことをすると後でオレが造ってやったといばられるだけでいやだという人がいたり、いろいろでした。

それよりもなんとか良い方法はないかといったら、国土庁（当時）がアメニティコンクールというのをやっていたんです。アメニティーという言葉をまだ知らなかったんです、アメ（飴）とティー（お茶）か？　コンクールに出したら、市役所の職員というのはなかなか作文が上手で、私が撮ってきた写真とか、私どもの今までの資料を添えて出したら、長野県の代表になってアメニティコンクールへ出場してしまったんです。「甲子園」へ行たんです。

東京に行ったら、10か所に選ばれたんです。そうしたら現地を見に来るということになって、来てもらってもこまるなと思っていたら、たまたま私どものところに定年で退職したしゃべることのうまい人がいて、その人に対応をお願いしたら、やあここには農業を考える会というのがあって、こうやって街と村と交流したり、こういうことをしているよと、話してくれたんです。また周りの田畑はほとんど荒れてなかったんです、毎日野菜を作っている人が多いので。そこを見ていって東京に帰ったら、優良賞になりましたという通知が来て、東京の会館で表彰式があるので区長さん以下お出かけくださいと。そこで区長として、役所も行くといって、一緒に行ったんです。

表彰式に行く前に視察に来たときのメンバーというのは、国土庁の役人が1人来るのに、東京のリサーチとか研究所が付いて来る、県の役人が付いて来る、地方事務所が来る、市役所が来る、8人もお付きが来て、「どうやって見せるなあ」と言ったら、神之峰という城跡の770mの高い山があるから、そこの遠くに連れて行って、「夜目、遠目、笠の内」といってできるだけ遠いところなら良く見えるだろうと、そこへ連れていって見せたんです。そうすると、ちょうど8月の今ごろです。稲穂が出ていくらかきれいになって、そこに白壁の土蔵が映えて、遠くから見ると農村の環境のいい風景が見える。「いいな」と言って、「現地に行きます」と言うんです。

よわったなあ、困るなと思ったんですが、実際に来てしまうからどうしようという話になって、じゃあ集会所にお招きして、ここは町場から遠いところだから日ましの菓子しかないので、梅の郷だから梅の菓子で、山から採ったクロモジの楊枝を添えて、桜の葉っぱが色付いてきたので、その上に乗せて出したんです。「お茶はどうする？」「俺らぁは国土庁に行っても一杯しかくれんで、一杯しかやらんようにしよう」そういう話になって、実際に一杯出しただけだったんです。8月さんざ歩いてきて、もう汗だくだったんだけれど、炊事場の方で「ダメ」と言って出さなかったんです。

そうしたら誰かがスズムシを持ってきて、縁側でスズムシを鳴かした。「スズムシが鳴いていますね」「このぐらい常です」と知らん顔して、それで事情聴取が終わって、いよいよ一杯くらい出さなければしょうがないけれども、こんなところではちゃんとしたところがないのでどうしよう。いいじゃないか、支所の前に焼き肉屋があるじゃないか、あそこへ行って、できるだけ牛の胃とか腸を食べさせよう、そういう話になって、「そんなもん食べるかなあ」「いや、あれも人の子なら美味いに決まってる、オレらも美味いんだから。赤坂の料亭に行って器を見て食べているよりも、それの方がよっぽど喜ぶよ」と言って連れて行ったら、本当にそうなんです。喜んで食べていただいて、酒を飲めばみんな同じになってしまうんです。

国の役人も、県庁の役人も同じになってやっていたら、「いや、明日の朝、街と村の交流の事業を見たい」と言うんです。「いや、6時半に来ればいつでも見られるから、おい出てくんなんしょ」と言ったら、天竜峡に泊まっているんで朝6時半には無理だと言うんです。「だってみんなゴルフ

に行くっていえば朝5時にだって行くじゃないか」と誰かがいうと、「そう言われればしょうがないな」と、それでも朝飯をホテルでは出してくれないと。それなら朝飯なら炊ける。ちょうどキビを作っていたんです。キビいりご飯で黄金ライスといって、ちょうど8月になれば端境期ですから、米も粘りがなくなりますが、餅キビを入れて黄金ライスにして食べれば結構だということと、海が遠いから干物しかない。干物と漬物とキビご飯でそれでいいかと聞くと、それでいいと言うので、それを出すことにしました。

朝、来ていただき、召し上がっていただいた。「やあ、たいへん美味しかった」と言ってご飯を食べていただいた。そういう経過があって、東京に帰ってから審査員の方から優良賞になりましたというので、優良賞をもらいに行ってきたということです。

そこで、優良賞をもらったんでどうするかという話になって、区長も役所にいたんでお前が案内して行けということで、市長のところに優良賞を持っていって、市長さん一生懸命やったらこういうものをいただいた。でも、まだポットン式トイレではアメニティとはいえないので、できるだけシャーと流すような事業を早く導入してほしいと言いましたら、「みんながそこまでやったんだったら、早くやりましょう」ということで、私どもは飯田市の中で、農業集落排水事業の3番目にやっていただきました。もう10年になりますが、あんな山のなかに、けっこうそういう集落で、自分たちでやろうという脚本を書いて、そして自分たちで決め、自分たちでやればできる。そういう意味で、私はいま感じているのは「シンガー・ソング・ライター」だということです。

それからもう一つは、13の集落実践グループをつくる活動です。私どもの方はお陰さまに「農業を考える会」という会もありましたので、それを核としてそのほかに自分たちでいくつもの実践のグループをつくりました。

いろいろなグループがたくさんあります。たとえば、6年かかって山から木を伐ってきて、自分たちのところへログハウスを造ってしまったグループだとか、あるいは毎日4色から5色の餅を搗いて、真空パックにしてゆうパックで正月に売り出すとか、あるいはキャラブキを煮たり、梅肉エキスを売り出すとか、そういうグループがあったり、あるいは「ホタルの分校」といって、ホタルをたくさん飼育してどんどん増やしていく事業をしたり、それからりんこのオーナー制度をやるとか、そういうグループがどこの集落にもできて、それが1年にいっぺん集まって発表会をやる。今は、全部自分たちでつくってきた味とか、美味いものくらべというかたちでやりながら、実践グループが正月の新年会と合わせてやっていて、どこの集落でも一つずつが、若干の差はあるかもしれませんが、地域全体が活動していかれるようになったというのは、いま言ったように三つの約束事がそれぞれあって、それを守ったからです。「鎮守の杜構想」をつくっただけではダメなのです。

4．ひさかた風土舎の戦術・戦略

そういうなかで、風土舎というものを玉井先生が退官されるときにおつくりになられて、「やあ、長谷部くん、飯田でそういうのをつくったらどうだい」と言われて、「じゃあまあ」と言って、私も先生の教えを受けて風土舎というのをつくろうといったのは、「鎮守の杜構想」をつくったメンバーがいたので、その人たちが何人かに呼びかけて、やりたい人は1万円持って集まれといったら、25人集まったんです。25人集まっていろんなことをやりましたが、だんだん鬼籍に入ったり健康を害したりして、今は15人になりました。それで17年ずっと続いて風土舎をやっています。

風土舎のことはそこのレジメにありますように、年会費6,000円で「鎮守の杜構想」といって、構想はできたけれどこれを実践してみようと、風土舎のメンバーがいろんなことをやってみせれば、「ああ、あんなことならオレたちもできるわ」といって、真似するんじゃないかということで風土舎で行いました。ここにありますように古代米を作ったり、キビを作ったり、コンニャクを作ったり、それからブルーベリーでワインを、作ったわけではないですが、企画して醸造所で造らせたり、

清酒「ひさかた」という久堅のネームの入った清酒を造ってもらったりしました。

それからカウチン工房という、羊毛を紡いでセーターやマフラーにするという、これも家の近くに綿羊の牧場があって、サフォーク種という食肉用の羊を飼っていたんですが、毛はどうしていると聞いたら、天井にそのままに置いてあると言うんで、「儲けろ」と言ったら、毛で儲けることを「もうけ」と言うんですが、「よかったら持っていけ」と言うのでもらってきました。狭いところで飼うもんで毛が汚れていたんですが、モノゲンで洗えばきれいになるというので、洗ったらものにならなんでモノゲン、というような駄洒落みたいな話でした。そういう努力をしながら、「ああ、これはおもしろい。これだったらきっとみんなが喜ぶよ」というようなことを考えて、中日新聞に20行の記事で「自分でセーターを紡いでみませんか」と掲載したら大勢来ちゃって、そのときに5台しか紡ぎ車がなかったんですが、30人も来ちゃって困ったということありました。じゃあ、なんとか紡ぎ車を手に入れようということになって、卓上機織り機と紡ぎ車を15台ずつ買ったんです。100万円お金を出して、飯田ではムトス補助事業があるので70万円はもらって、1年に1回か2回ずつ工房を開いています。

それから学習会活動が私どもの生命でありますので、寺子屋というのをやっています。今日まで夏休みの寺子屋で、今日で下山をしました。今まで600何人の子供たちが寺子屋で育っています。ここは塾ではありません。縦社会の体験とか、「宿題で泣かない夏休み」といって、宿題帳を持ってきて朝学です。6時半のラジオ体操が終わると7時半まで朝学をやって朝のうちに帰る。これを17年間ずっと続けてきました。たいへん喜ばれて、子供たちは明日から学校ですが、宿題もみんな終わっていて喜びいさんで行けるなあと、これは大変な人気です。

それから「風土舎通信」というのがあります。通信を今まで月1回ずつ出してきました。いま197号になりました。10月になると200号になるんで、200号になったら保存版にしようと、この前市役所に相談に行ったら、20万円の印刷費をくれるというんで、じゃあ半分くらい売れば元は取れるかなという見込みです。オピニオン的な役割は果たしていませんけれど、小さな村の小さな記録も残していくという、こんなことがあった、あんなことがあったと、新聞に載らない小さな記事も載せて、200号までになると地域史の記録として結構なものになるものだと自慢をしているところです。

それから自給自足学習会というのをやっています。自分たちの学習会を自分たちの仲間でやるということで、川柳で得意がっている人がいまして、オレはこうなった、ああなったと自慢ばっかり言っているので、「じゃあ、お前が今日の講師をやれ」と、会員15人が順番で講師になると決めてやっています。川柳の話の後は、弓の自慢をする人が弓は心技一体でなければダメだという話をちゃんとしたり、「ラグビーにかけた青春」というのもありました。

一番感動したのは、お父さんが19歳で、お母さんが20歳でそこで生まれた自分は、もらわれて上久堅に来て、大きくなって今は立派な会社にいて、これだけになれて嫁さんをもらって、子供ができて孫ができてこうなった。でも、出生の秘密はなかなか言えなかったけれども、オレはその話をしていいかと言って、みんなのお前で出生の話をしたんです。感動しました。生みの親は両方とも国鉄の職員で、こっちとむこうの駅に二人がいて、恋をしてできた子供でしたので、育てられないということで上平へもらわれてきた。もらいっ子だということはだいたいの人は知っていたんですが、そういうことだったということはみんな知らなくて、彼が仲間を信頼してそういう話をしてくれたんです。私がこのことを通信に書いていいかと聞いたら、いいと言うんです。それで、そのことを通信に書きました。村中の人が知ったんです。知っても彼は胸をはって、まだお母さんは生きているので、私はお母さんに孫を連れて会いに行く、そういう話をしたんです。

こういう自給自足の学習会というのは、なにも立派な先生を呼んできてお話を聞かなくても、人間の感動とか、仲間を信頼するとか、そういうことを学ぶ機会としては結構できるんではないかなと、まあこんなふうに自給自足の学習会を持っています。ワインのソムリエのある方がいるんです

が、その方を頼むと10万円とアゴアシ（食事代・交通費）付きなら15万円くらいかかるんですが、その方は自給自足だからオレも行くと言って、自分で来てくださって一銭も講師料は私どもは払わなくて、そういう人は結構いまして自給自足の学習会に向こうから来てくださる。そういうことをやっています。

あとは交流活動で、日本福祉大学の大濱ゼミという福祉を勉強するゼミが飯田に来て2泊3日で、今は4泊5日くらいで彼らが途上国に行く前段の勉強会に上久堅を選んでくださっています。もう一つは京都大学農学部の学生自治会ですが、彼らとの交流しながら私どもは京都大学の学園祭に行きます。彼らも来ますけれども、私どもも学園祭に行きます。りんご農家と牛を飼っている農家がありますので、牛串とリンゴと、落ちて傷のついたリンゴに「信州えくぼりんご」という名前を付けて、これが非常に人気で、信州大学の学生たちも行っていますけれども、私どもと競争をしながらそういう交流をやって、夜は京都の学生たちと酒を飲んで楽しんで、前の市長さんも京都の出身だったので、いっしょに行って学生たちと飲んで、きたない三高の寮で一緒に寝てきたんです。市役所の職員にも一緒に行かないかと誘ったんですが、「なんで？」と言うので、京都大学と仲良くしておくと、卒業して農水省へ行ったり、農協の中央会に行ったりして役立つからどうだいと言ったところ、「そういうこともあるか」と。じゃあその代わりバス代とガソリン代は役所で持てと言って行きました。そういうふうに楽しみながらやっています。

それから去年まで法政大学が来ていたんですが、これは学生たちが多すぎて、私どもの方で収容できなくなって、ちがう方に行きました。それから国際協力機構（JICA）、今日も来ています。明日も私どもの上久堅へ来るんですが、発展途上国8か国から10人の、今までインドネシアとかコロンビアなどからたくさん来ていますが、飯田で1週間勉強して、上久堅の地域づくりを学んだり、私どもの集落に行って、集会所や温水溜池、下水の処理施設を見たり、日本の農家の暮らしを見ていきます。

そのほかにもやっていますが、そういうふうにして私どもも風土舎をやりながら、中心は集落をどう興していくかということです。メンバーはいま15人おりますが、それぞれの集落の実践グループのメンバーが集まって、ひと月に1回ですが酒を飲みながら自分の地域に帰ってくる。そのようにして活動をしています。

ということで、ちょうど私の持ち時間になりましたので、早口でいろいろ申し上げまして失礼をいたしました。ありがとうございました。

【別添資料１】 **柏原農業を考える会の歩み** （年表）

年度	世帯	会長	決算（円）	活動等の概要	産直出荷
(1982) 昭57	34	勉	199.010	準備会 6/22 区委員・嘱託員・農家組合長等 創設 6/25 知久町二と交流 11.4万円売上 研修 9/24 卸団地、市農協、堂平リンゴ団地	……
58	34	勉	357.638	研修 9/25 新野.売木.茶臼山.清内路 ９月例会 農協中央会 掘氏	……
59	34	康人	203.488	研修 9/24 諏訪.北山.清里.野辺山高原 11月例会 農改普及所 米山由子氏	……
60 (1985)	35	伝治	287.135	知久町交流産直始まる 6/15～10/19まで 研修 9/23 阿智.平谷.根羽.稲武.美濃焼き	袋 12.676
61	31	孝雄	631.349	研修 9/21 サントリー.昇仙峡.県立美術館 12月例会 柏原、越久保、小野子Ｇ交流会	21.130
62	23	康人	776.932	研修 9/27 豊橋種苗（バイオテクノロジー） ５月例会 82ＢＫ 荻原莞爾氏 パイロット事業補助 20万円	32.349
63	22	和夫	820.6601	研修 原村農協.尖石遺跡.美ヶ原高原美術館 10月例会 興村塾視察受入 パイロット事業補助 １０万円	41.649
(1989) 平成元年	14	和夫	408.996	研修 10/20 富士健康センター.富士五合目 ６月例会 ふるさとの歴史 清水與智光氏 パイロット事業補助 5万円	38.391
2	14	励	600.604	研修 10/2 上諏訪温泉.木曾平沢漆器.車屋 11月例会 知久町交流.堂平りんご団地 ムトス飯田賞受賞 副賞 10万円	32.276
3	15	励	1.170.749	研修 10/20.21 善光寺.湯田中.鬼押出.軽井沢 市農業祭初参加 柏原小判もち創作	43.271
4	15	励	1.174.414	研修 10/19.20 なんば花月.中央卸市場.奈良 ９月例会 上平 のらくろ との交流会	50.322
5	15	康人	1.511.299	研修 10/19.20 佐渡ヶ島 グループ交流 10月例会 三重県津市農協安芸来訪	47.989
6	9	康人	1.049.520	研修 9/25.26 津市ＪＡ.伊勢神宮 １月例会信州大学名誉教授 玉井袈裟男氏 第６回生涯学習団体事業助成 20万円	43.438
7	9	良治	786.081	研修 9/24.25 福井県美浜町.美方五湖.原発 10月例会 JAいいだ 橋爪寛治氏	33.712
8	10	良治	1.089.923	研修 9/23.24h 箱根.伊豆.長岡温泉 ２月例会 こいくぼ農工舎との交流	35.438
9	11	良治	922.051	研修 9/27.28 御在所岳.もくもくファーム ８月例会 ＪＡいいだ 橋爪寛治氏 市制施行 60 周年ﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙ 10/26 参加	41.372
10	10	和夫	1.089.923	研修 11/27.28 南紀勝浦.那智の滝.堂ヶ島温泉 ７月例会 会員圃場の巡視	40.076

11 (1999)	10	和夫	1.013.026	研修 11/22.23 山形県湯の浜温泉ツアー 8 月例会 夏ばて防止 スタミナ太郎	45.136
12 (2000)	9	和夫	874.463	研修 11/22.23 西伊豆ツアー.戸田温泉 7 月例会 JA みなみ信州飯田 橋爪寛治氏	49.519
13 (2001)	8	和夫	786.971	研修 11/27.28 飛鳥.古寺巡り.柳生探訪 20 年の歩み刊行、7 月例会野菜畑巡視	44.713
14 (2002)	8	吉雄	884.143	研修 10/16・17 日光東照宮バスツアー 知久町合同収穫祭 10 月 20 日不動温泉	46.869
15 (2003)	7	久実	778.567	月例研究会(第 1 月曜日) 研修旅行、まちとむらの交流	38.104
16 (2004)	6	久実	778.888	安心安全な農産物の出荷 知久町へ「謝恩」に柏原産米を送る	26.847
17 (2005)	6	久実	686.560	農産物直売所等研修会に参加 合同収穫祭　10 月 17 日神之峰床山荘	25.838
18 (2006)	6	久実	(予算) 552.461	地区内圃場視察研修・月例研究会 10/16 知久町 1 丁目と収穫祭(茸狩り)	27.512
19 (2007)	6	吉雄	553.861	月例研究会、茸狩り、飯田りんごん参加	25.276
合　計				**'07 年までの産直野菜の出荷総量**	**843.903**

1982 年（昭 57） 原平区が中心になり、『柏原農業を考える会』を創設。月例の学習会が始まる
1985 年（昭 60）「まち」（知久町）と「むら」（柏原）の交流が始まる
野菜の産地直送事業（82ＢＫ前無人スタンド設置）
1987 年（昭 62）農業地域マネージメントのモデル集落の指定を受ける
パイロット事業補助　一年次　20 万円
1988 年（昭 63）パイロット事業補助　二年次　10 万円
1989 年（平.元）パイロット事業補助　三年次　5 万円
1990 年（平 2）**ムトス飯田賞を受賞**　副賞 10 万円と笛吹く少年のレリーフ
1991 年（平 3）視察研修が 1 泊 2 日になる（志賀・草津ルート）
1991 年（平 3）第 18 回 飯田市農業祭初めて参加　柏原小判モチ創作
1994 年（平 6）**第 6 回 生涯学習団体事業助成**　20 万円（フレンドシップ財団）
1994 年（平 6）信州大学名誉教授　玉井袈裟男先生の講演会を開催する
1997 年（平 9）飯田市制６０周年記念フェスティバルに参加する
1998 年（平 10）会員の野菜圃場の巡視が始まる
2001 年（平 13）**創設 20 周年記念『20 年の歩み』を発行する**
2004 年（平 16）農薬の使用規制が厳しくなる

❋　会の課題
・高齢化に伴う会員世帯の減少、仲間を増やす、事業の継続が、課題である
・ここ 2～3 年回収率無人スタンドの回収率（90～85%）が低下している

☆　産直野菜の'07 年（平成 19 年）までの　**総出荷数（袋 ¥100）843.903 袋**

【別添資料2】

「まちとむら」産直交流の概要

飯田市上久堅原平　柏原農業を考える会

設　立　①　１９８２年（昭和57年）

ねらい　②　「農」をベースに、暮らしに潤いとゆとりを　!!

むら柏原　③　柏原―１０km―知久町　まち知久町　④

むらに住む生産者と、まちに住む消費者の交流
『地域で生産・地域で消費』…「地産地消」

内　容　⑤　Ⅰ　定例学習会　（農業の技術、生活の諸課題 etc）

⑥　Ⅱ　野菜の産地直送事業　（1985年・昭和60年）

⑦ 栽培 → 収　穫（前日） → 荷造り（前日） → 集　荷（当日 Am6：30） → 搬　送（9：30）

5月下旬～10月末日まで

⑧ 期　間

⑨ 出荷量　1袋 @100円　1日 200袋～350袋

⑩ 知久町1丁目の賑わい

（10：００販売開始）
無人販売スタンド
知久町1丁目
82銀行前

（pm1：00）
販売終了
（まちで保管）

（翌日）
現金受領

（翌週）
1週間分
まとめて配分

⑪ どのようにして仲間をつくるか

1　みんなの「つぶやき」や「ささやき」の声をまとめる
2　呼びかけの核になる人を集める
3　意思統一ができたら、みんなに呼びかける
4　集まればしめたもの。本音を出し合って話し合いをする
5　組織の名前や、きまりができれば完結だ

【別添資料３】　**《集落づくり構想策定の設計図》**　上久堅.原平区６８世帯

資料を集める　アンケートで意向を調べる　現地調査で実態を確認する

↓

４つの柱の条件整備

Ⅰ成立する条件　Ⅱ維持する条件　Ⅲ[redacted]　Ⅳ発展する条件

１地理的位置
２歴史と伝統

３財政の確立
４防災対策

[redacted]

７経済と生産
８建設的事業

１）原平区白書の作成
①区の地理的地位
②交通
③農業
④水利
⑤公共施設と資産

２）歴史・民俗・歴史
①遺跡史跡の保存
②民俗的行事伝承
③神社・仏閣
④自主的実践集団

３）区の行政の概要
４）白書の作成

1）財政の確立
①世帯の負担
②区有林と分収金
③特別会計の設置

２）施設の維持管理
①諸施設管理・清掃
②道路の維持管理

３）防災対策
①風水害対策
②緊急事態の対応
③防火・防犯対策

１）地域福祉の推進
①生活弱者への気配り
②隣り近所の助け合い

2）快適生活環境確保
①ゴミ不法投棄不可
②ゴミ分別収集徹底
③道路端支障木等

３）学習文化活動推進
①一人一グループ加入
②民俗行事の継承

１）農業の生産活動
①兼業農家の安定
②受委託制度の導入

2）建設関連事業
①統合水道への対応
②土木関係の改修等
③憩いの広場の整備

Ⅴ　**実現に向けての判断**　１自分たちの努力や工夫で、実現できるものを見極める。
２行政の方針や施策で、実現できるものは何か見極める。
３その他、国・県の施策により、実現するものは何か見極める

Ⅵ　**ⅠⅡⅢⅣ項の１～８までの項目に取り組む**（区の諸機関、団体で連携して取り組む）

区委員会　[redacted]　[redacted]　各種自主的グループ　行政関係団体　公民館の分館

環境衛生組合　交通安全会　社会福祉協議会　青少年育成会　防火防犯委員会　日赤奉仕団　[redacted]

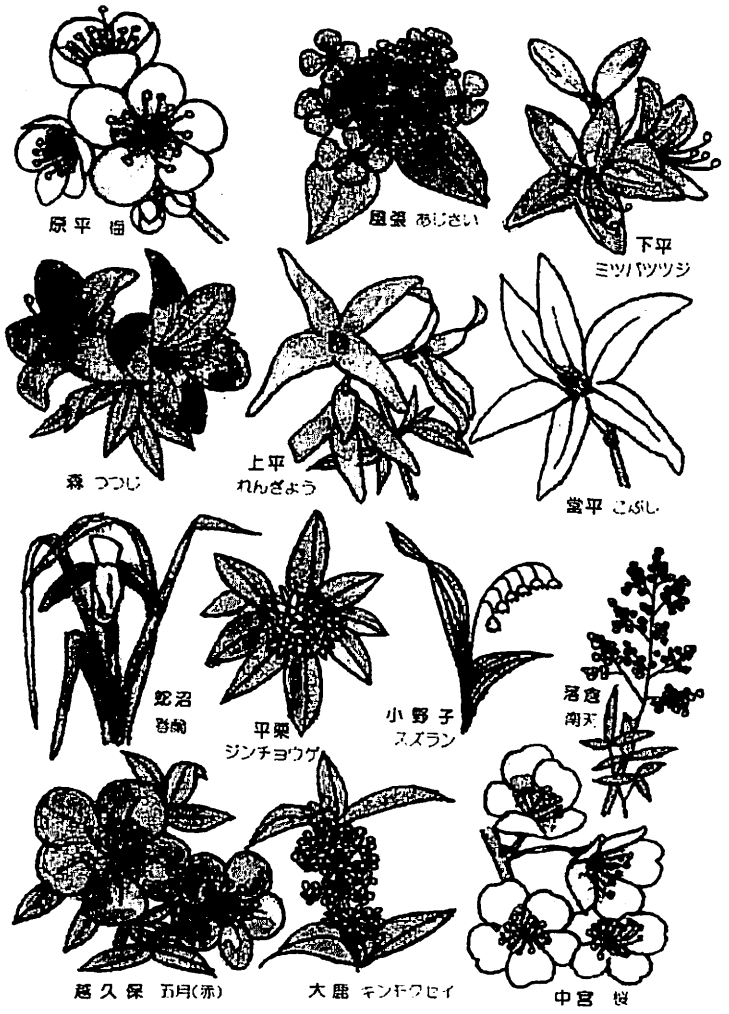
活花グループ　高齢者クラブ　ゴルフクラブ　そばの会　さわやか健康教室　釣天狗の会　農考会

庭づくり研究会　上組・下組婦人会　パソコン寺子屋　民踊クラブ　[redacted]

(別添資料 4)

鎮守の杜構想

―十三(とさ)の郷(さと)づくり―



飯田市上久堅地域づくり策定委員会

【別添資料 5】

ひさかた風土舎の活動概要

ね　ら　い　・・・地域の自立・個の自律　・自給自足の奨め

キャッチフレーズ　・・・『農』をベースに土を、地域を、心を耕す

集団の性格　・・・遊び心のある異業種仲間の実践集団（91 年 2 月発足）

会員の条件　・・・年会費 6.000 円　入退会自由、誰でも可　会員 15 名

地域での役割　・・・鎮守の杜構想…十三(ときのさと)の郷づくりの具現

実践活動

- **特産品作り**
  - ……雑穀の栽培と奨励（こきび、古代米、こんにゃく等）
  - ……ワイン・清酒の企画（ブルーベリーワイン、清酒ひさかた）
  - ……カウチン工房の開設（羊毛の紡ぎ、織り，草木染め　マフラー、ベスト、フェルト加工など）
- **学習文化**
  - ……鎮守の杜寺子屋開設（夏休み期間中の朝学 Am6：30～7：30 まで）'91 年から
  - ……風土舎通信の発行　（毎月 1 回 500 部発行　現在 No 197（'08 年 7 月）
  - ……自給自足学習会　（風土舎村塾の開催）
- **交流活動**
  - ……日本福祉大学　（大濱ゼミの受入れと交流）　'93 年から
  - ……京都大学農学部　（学生自治会との交流）　'95 年から
  - ……法政大学人間環境学部　（石神ゼミの受入れと交流）　'01 年から
  - ……JICA（国際協力機構）.（途上国の{PLSD 研修}の受入と交流　'98 年から
  - ……内外のまち・むらづくりグループとの交流（視察対応）
- **その他**
  - ……京都大学 11 月祭参加　（キャンパスにテントを張り出店と交流）
  - ……「まち」・「むら」づくりの各種集会、研修会、研究会に参加

所在地　長野県飯田市上久堅 1206　ひさかた風土舎
◆TEL　0265－29－7338　090-2404-6737　◆FAX　0265－29－7338
◆E-mail：fuudosya@mis.janis.or.jp　◆http://www10.plala./fudosya/